

# 西宮市立郷土資料館ニュース

NISHINOMIYA  
CITY  
MUSEUM

1993. 1. 1

資料館ノート

## 常設展示室の展示学

西川卓志

### 1. はじめに

近年、博物館の建設ブームの初期に建設された博物館が建て直しの時期をむかえている。新しく生まれ変わったこれら博物館では、広い意味での館運営に永年の蓄積を有しており、新設館では考えの及ばないような点にも配慮した各種の試みが見受けられる。特に、常設展示における実物資料重視の傾向は顕著で、かつてのような写真とグラフィックを多用したいわゆる「展示解説パネル」の類は、影をひそめつつある。なかには、各展示ケースの前に小型のスライド投影機を設置し、従来ならパネルに集約されていた文字情報をスライド数点に集約し、付属情報を求める観覧者には、スイッチひとつで1、2分間提供する、というシステムまで採用しているところもある。そこでは、解説パネルが展示ケースの壁に吊下がっているという従来スタイルはとられず、パネルに代わって洗練された実物(第一次資料)で溢れている。少しずつ変化している博物館・資料館の展示の傾向と、本市郷土資料館のそれとを比較し、本市郷土資料館の展示の現況を整理したい。

### 2. 郷土資料館の常設展示

本館は、常設展示室の展示テーマを「西宮の歴史」として、1985年に開館した。このテーマは、児童・生徒を含む観覧者に対して一般的・常識的であるとして採用された。このテーマにそって、開館3年前から「常設展示検討委員会」を設け、展示シナリオを作成しそれを展示として具体化する作業が進行した。「西宮の歴史」というテーマは、「西宮市の歴史を概観する」という内容に置き換えられ、展示テーマの整理の方向とその外枠が示された。「西宮の歴史」というテーマがシナリオに集約されるには、西宮でおこった歴史的事象が原因と結果に整理され、一定の因果律、脈絡を基本にまとめられていることが、そのひとつの前提となる。この点における西宮市に蓄積されている情報量は莫大であり、それは『西宮市史』全8巻として結実している。展示シナリオの作成はこれら先学の集積された情報の整理から開始され、最終的に常設展示室に設置された4枚の年表・20箇所あまりの展示コーナーとなっている。展示全体は、要領よく大著の情報を整理したものとなり、開館当初の常設展示室では新たに見いだされた新資料を加え、『西宮市史』の世界が立体

化した。

常設展示が完成、開陳されてから、はや7年間が経過した。この間多くの方々から、常設展示に関する貴重なご意見をいただいた。そのなかに、「展示内容が少しむずかしい」というものがある。この声は郷土資料館の展示だけに留まらず、どの地方の博物館においても耳にする。丁寧に常設展示を制作した博物館であればあるほど学芸員は困惑する。この意見を文字通り、解説の文章などが専門的で一般には理解が困難であることに対する批判と理解し、解説文などの再点検を充分に行うことは重要である。しかし、近年多くの歴史系博物館から指摘があるように、この「展示がむずかしい」という発言は、既存の歴史研究の蓄積を基本資料として常設展示を作成する、という作業自体が持つ問題であるという可能性が高い。

既存の完成された歴史研究は、歴史資料の蓄積を背景に幾重にも分析を重ね、その成果を因果関係を整理し歴史の脈絡として示すものであることは先述した。この脈絡だけに従って歴史を「概観する」展示を作成すると、シナリオという文字の段階では理解しやすいが、展示にするのがむずかしいという現象が生じる。これは、これら歴史研究が多くの場合文献資料を基本として進められるからに他ならない。このとき、実物資料は直接その脈絡を生み出すことになら役割を演じていないにもかかわらず、あたかも脈絡を主張する材料となったかのように位置づけられ展示台にのる。この脈絡を要約したコーナー名にはそれぞれ相互に関連があるにもかかわらず、実物資料はその関連性からは孤立する。このような、完成された脈絡と懸命に調査されて選定された実物資料が展示場において漠然と遊離する現象にこそ「わかりにくい」という発言の真意があると考えられる。

### 3. 新しい展示の模索

これを克服する対策として、本市郷土資料館では、開館以後「特別展・企画陳列・土よう展示室・常設展示室展示替え」において、

実物を多く展示することを最優先してきた。これは、館蔵資料をできるだけ多く公開していくことに加え、前述の「展示がむずかしい」という指摘を、「脈絡と実物資料の遊離」を避けるという観点にたって克服しようとする試みである。

実物資料はいろいろな情報を発散する存在である。それゆえに、観覧者は独自の観点からの鑑賞を許され、実物資料もそれに耐えることができるはずである。実物資料は本来それ自体自由な鑑賞の対象であり、観覧者は自由な立場で実物と向かいあえたはずである。近来見られる展示では、この実物資料と観覧者の間に展示にストーリーを持たせるという姿勢が強く入り込み、歴史という脈絡が知識化され、実物ではなく知識情報そのものが前面に出てくるという現象が出現してきた。これが文字情報と関連写真パネルの氾濫であり、本館の開館時の展示にも一部その影響を受けたコーナーがあった。

「土よう展示室」では、展示資料を触感で理解させるため、学芸員とともに実際に資料を使用する体験学習の展示を実施し、「企画陳列」では小学校の社会科副読本と関連し、実物資料（おもに民具）をゆるやかに分類し提示するにとどめる民具の展示を模索している。これらに共通する姿勢は、実物をできるだけ多く展示し、それに接した観覧者が自由な発想で実物を鑑賞できる環境を用意するという点にある。

### 4. おわりに

ながながと展示について述べてきた。しかし、本稿は実物にかかる解説をまったく否定しようとするものではない。最低限の情報は常に必要であり、小形のラベルに示すべきである。ただ、博物館は実物資料またはそれに準ずる資料の鑑賞の場であり、知識・情報のみを単独で提供する場ではない。今後の郷土資料館の課題は、選りすぐった実物資料をより多く観覧者に提示し、じっくりとそれを鑑賞できる場を用意することにある。

(にしかわ たくし 当館学芸員)

## 西宮市における石造遺品について—補遺—

坂田 磨耶子

## 1. はじめに

西宮市の石造遺品については、さきに田岡香逸氏の『西宮市史』第7巻 資料編4（昭和42年3月刊）に詳細な「金石文資料調査記録」が掲載されている。（以下「田岡氏資料」とする）

当時においても、また今後もこれら資料の写真、拓影、実測図の正確さを越える事はできないと思われる。

しかしながら、なにぶんにも25年という歳月の経過は、貴重な文化財といえども移動、散逸などを免れる事は困難である。まして、石造遺品のように、風雨に晒されやすい寺院の境内や墓地、時に路傍に放置される場合もあるため、今回田岡氏の資料に基づき現状確認を実施した結果、現状変更、ならびに不見当遺品も若干見られた。

その代り、道路工事などの際出土した石造遺品や、墓地整理の際無縁仏群の中から発見された遺品も間々見られたが、紀年銘の確認は困難で、室町末か、江戸初期か判断できない遺品も多い。

西宮市の場合、田岡氏調査の石造遺品に限れば、慶長以前の紀年銘を有するのは、応永16年（1409）の室町初期を初発とし、慶長20年（1615）までの8基にすぎず、無銘石造遺品も推定による鎌倉期9基、南北朝期10基、室郡期3基の計22基に止まっている。

## 2. 在銘遺品の変更

今回の調査で在銘遺品中所在地の変更が見られるのは、次の2件である（ ）内は田岡氏資料の第1表慶長末年以前の紀年銘金石年表による。

## -1- (10) 慶長13年（1908）一石五輪塔

砂岩製で完全、奥畑 満池谷墓地にあったが、現在川添町の文化課が保管している。

## -2- (13) 慶長20年（1615）一石五輪塔

砂岩製で完全、前記（10）同様奥畑 満池谷墓地にあったが、現在川添町の文化課が保管している。

## 3. 無銘遺品の変更

今回の調査で著しい変更、もしくは紛失が見られたのは、次の6件である。（ ）内は田岡氏資料の第2表無銘石造遺品の推定年表による。

## -1- (無銘9鎌倉時代) 伝、佐々成政墓

現在上鳴尾共同墓地の中央部に十三重塔として復元されているが、かつては笠九層を積み重ねていたものである。田岡氏調査当時も鳴尾町の西方寺門内の西側に、道路拡張時に掘り出された笠四層が積み重ねられており、実測の結果、十三層に組み合うものとされている。

敷地周辺の巻石を、西方寺二十世誠舉徹善師が、昭和59年12月に寄贈し、同寺所蔵の笠四層を加え十三層に復元したのが現塔である。

## -2- (無銘10南北朝時代) 笠塔婆残欠

花崗岩製で塔身だけであるが、もと奥畑 満池谷墓地にあったもので、現在川添町の文化課が保管している。

## -3- (無銘17南北朝時代) 五輪卒塔婆形板碑

かつて上鳴尾町の共同墓地北端の無縁墓にあったが、現在は六湛寺町海清寺境内に移されている。この塔形は半截五輪塔とも呼ばれるように、五輪塔を縦半分に截ったような板碑で、長い地輪部（基礎）の舟形輪郭内に地藏坐像を陽刻している。像容のある板碑は市内各所にかなり見られるが、石材が風化しやすい花崗岩であるため、ほとんど紀年銘は見られない。

板碑形ではないものの本市最古の紀年銘を有する塩瀬町生瀬の浄橋寺に五輪卒塔婆があるが、この長い地輪部（基礎）上方の、やは

り舟形輪郭内に、定印の弥陀坐像を陽刻している。そして板碑形より五輪卒塔婆形が一般的であり、像客も地蔵は少なく、弥陀坐像が圧倒的に多く見られる。

#### -4- (無銘19南北朝時代) 大日種子板碑

前記五輪卒塔婆形板碑同様、もと上鳴尾共同墓地北端の無縁墓にあったが、現在は六湛寺町海清寺境内に、下部をコンクリートに埋め込まれて立っている。当時は総高116センチとあるが、現高は81センチで、下部35センチを埋めている。

#### -5- (無銘20室町時代) 宝篋印塔残欠

馬場町西蓮寺本堂北方の墓地にあった、とされるが、墓地整備の際紛失したらしく、墓地内には見当たらない。高さ14.8センチ、幅15.3センチの小さな塔身である。

#### -6- (無銘22室町時代) 伝、海清寺開山無因宗因の墓塔

六湛寺町海清寺境内にあるが、田岡氏資料に禅堂の南側の壇上にあり、塔身と中台の間の請花を欠失している。とあるが、場所も禅堂の南ではあるが、東の堀際に移されており、中台も抜かれている。従って基礎上の竿に直接塔身が乗せられ、安定した重原さを失っているのは惜しまれる。

#### 4. 田岡氏調査以外の在銘石造遺品

田岡氏の調査以後に発見された在銘石造遺品は次のとおりである。ただし、現在未確認資料は原則として除外した。整理上補遺として番号を付している。

##### (補遺1) 文亀3年(1503) 一石五輪塔

花崗岩製で完全である。去る昭和50年11月、市庭町市民館前の道路下より、工事中出土したもので、現在社家町円満寺の無縁墓地に移管されている。

各面五輪塔四方の梵字があり、南の修行門アの面、地輪の両脇に銘文がある。総高88センチ、地輪の高さ24.5センチ、同幅26センチで、銘は、人数十五人／文キ三年式月日とある。文はよくわかるが、亀を省略し、片カナの「キ」と思われる文字を拓本で検出した。一石五輪塔としては大きな部類である。

##### (補遺2) 大永7年(1527) 一石五輪塔

砂岩製で完全である。社家町の吉井貞俊家の前庭に立っている。総高47センチ、地輪高さ(根部をふくむ)22.5センチ、同幅11.7センチ、正面のみキヤカラバア (五輪塔四方の梵字中東の発心門)を陰刻し、その面の地輪に次の銘文が見られる。大永七年／妙珍禅尼／卯月二日、人名の玆は異体文字で珍である。

##### (補遺3) 天文11年(1542) 一石五輪塔

##### (写真1)

花崗岩製で風空輪を欠失している。現在は川添町の文化課に保管されているが、もと六湛寺町の地藏堂にあった。総高45センチ、地輪高さ19.8センチ、同幅上18.5センチ、下19.5センチ、各面に五輪塔四方の梵字がある。地輪アの面に次の銘文が見られる。宗留禅定／天文拾一年拾月十二日、一行に納まらず乱れ書きとなっている。



写真1 補遺3 文化課保管天文十一年一石五輪塔。

**(補遺4) 天文18年(1545) 一石五輪塔**

花崗岩製で風空輪を欠失している。現在は川添町の文化課に保管されているが、これも(補遺3)同様もと六湛寺町の地藏堂にあった。現高50.5センチ、地輪高さ23.3センチ、同幅上19.3センチ、下19.7センチ、各面に五輪塔四方の梵字がある。地輪<sup>ア</sup>の面に次の銘文が見られる。為□□宗意／禪定尼／念三日／天文十八年五月、念三日は廿三日である。

**(補遺5) 永禄6年(1563) 一石五輪塔**

花崗岩製で風空輪を欠失している。与古道町円福寺の無縁墓の中に置いてあるが、前後右左に墓石が詰め込まれ見るのも困難な状況である。現高55センチ、地輪高さ21センチ、同幅25.5センチ、正面に五輪塔四方の梵字中<sup>ラ</sup>と<sup>キ</sup>があり、地輪に次の銘文があるが、判読は困難である。西為逆修／人数／永禄六年<sup>八月</sup>廿七日、行が重なっている。

**(補遺7) 天正18年(1590) 一石五輪塔**

花崗岩製で完全である。産所町西安寺の無縁墓にある。現高71.5センチ、地輪高さ30センチ、同幅上19センチ、下18センチ、地輪の正面に銘文があるが、形から見て江戸期のもので側面に「延享…」の年号がある。参考のため正面の銘文を記しておきたい。天正十八年／妙正禪定尼／八月廿一日、

以上の七基が慶長以前の紀年銘を有する石造遺品である。

**5. 田岡氏資料以外の無銘石造遺品**

田岡氏の調査には見られないが、多くは無銘のため確たる時代判定は困難であった。従って特色のある次の三点について考察したい。整理上補遺として番号を付している。

**(無銘補遺1) 鎌倉末か南北朝時代 層塔初層軸部(塔身)**

花崗岩製で甲山町神呪寺境内に、上に「四国西国遥拝塚」と彫った円柱が立てられていて、境内鐘樓の東側にある。四面四方仏であるが、西北面だけは定印の弥陀と思われるものの、磨滅がひどく他の面は何佛とも判断できない。現高49センチ、幅46.5センチ、像高

は蓮座共で37.5センチである。

**(無銘補遺2) 南北朝時代 宝篋印塔残欠**

花崗岩製で段上町の貝之介墓地(永福寺内墓地)に塔身だけが現在五輪塔の水輪の上に乗せてある(写真2)。正面だけ月輪を彫り窪めた中に如来形生像が陽刻され、右へ<sup>ク</sup>の種子が同様の月輪内に葉研彫りされている。金剛界四化の<sup>タ</sup>(宝生)を像容であらわした珍しい遺品である。上部に高さ1.5センチの杓があるが下部は素面である。現高(杓を除く)24センチ、幅24センチ、月輪径20センチである。



写真2 無銘補遺2 段上町宝篋印塔塔身

**(無銘補遺3) 室町時代(あるいは江戸初期か) 四柱石の一部か。**

花崗岩製で東山町の森林公園から降りたバス道の左手に小祠が四社並び、その右のコンクリートの壇上にある宝篋印塔の基礎の上に立っている。正面に持錫持珠の地藏立像を陽刻し、その左側面(写真3)と背面に杓穴がある。杓穴は上から3.5センチ降りて高さ8センチ、幅8センチ、深さ4センチである。石の高さ41センチ、像高22センチ、石の幅19センチ、蓮座幅15センチ、上方錐状となっていて、正面観は山形である。各面二段の切り込みをめぐらし、石の側面幅も19センチであるから、完全な柱状で杓穴に貫石を入れ角柱とし



写真3 無銘補遺3 東山町道路沿いの四柱石

ていた、と思われる。非常に珍しい遺品であるが、後日、これと同様の遺品を上甲子園四丁目の下瓦林墓地で見かけた。

上方錐状で正面観は山形となり、二段の切り込みがあるのも東山町へ遺品と同様であるが、正面蓮座上の地藏立像は持錫持珠で、左側も同じく地藏立像であるが、幢幡を両手で持ち背面と右側は上から3.5センチ降りて高さ7センチ、幅4.5センチ、深さ2.5センチの柄穴がある。貫石を入れた左前方角柱で四隅に立てられる四柱石の一部と思われるが、いずれも像容などから見て室町期の遺品であろう。総高34.5センチ、石の幅17センチである。東山町の遺品よりやや小さい。

偶然ではあるが、西宮市の北部東山町と、南部の上甲子園四丁目に、ほぼ同じ様式の遺品を発見したが、まだ他にも類似の遺品があるのではないか、と思われる。

#### 6. おわりに

以上、田岡氏資料の再確認という作業を行ったが、寺院によっては当時のままの現状が見られる一方、墓地整備などで石造遺品の散逸なども見られた。文化課に保管されているものもあって、概して石造遺品の保存は良好と思われる。

在銘遺品ばかりでなく、様式中世の遺品と思われる無銘遺品は今後も道路工事等で出土が予想される。その際は文化課において遺品の破壊や散逸のないよう善処される事を祈って止まない。

(さかた まよこ)

## 西宮築洲勸進帳と絵馬

井 阪 康 二

### 1. はじめに

築洲とは、江戸時代後期、西宮の町人 当舎金兵衛が西宮港の西側に沖へ向けて作った防波堤のようなものです。

この築洲の工事は人々の話題になったらしく、「摂陽奇観」という本には「築洲勸進帳」や築洲の絵馬の事、西宮の町人が書いた「四井屋久兵衛覚之事」には工事のことが書かれています。ここでは主に勸進帳と絵馬について紹介します。

### 2 江戸時代後期の西宮港

この時代の海上交通で兵庫の港と大坂の港の間に、風などで海が荒れた時にその難をのがれるための港がなかったようです。また、西宮では酒やその他の物資を江戸へ海上輸送するための港が必要となりました。そこで、西宮港が目ざされました。

ところが西宮港は夙川などから流れ出る土砂のために海底が浅く、大きな船の出入りが難しかったので、当舎金兵衛は大坂町奉行所の許可を得て、築洲の工事を計画しました。

金兵衛は多くの人より、工事の方法の知恵を借りる事と、工事費の援助を得るために「西宮築洲勸進帳」を人々に回しました。また、築洲工事成就祈願のためと、人々に築洲の形を知ってもらうために、それを描いた絵馬を西宮神社に奉納しました。

### 3 築洲勸進帳と絵馬

「摂陽奇観」の享和元年（1801）3月条に「西宮浦築洲勸進御免」とあり、「築洲勸進帳」の全文が出ています。そのあらまは次のような事です。

西宮浦は昔より由緒ある港で万葉集にも読まれています。しかし今は小さな港です。

兵庫の港より浪速の港までの海上十里の間、船をつなぎとめる港がありません。西南の風

がはげしく吹けば、西宮の沖を通る船は沈んだりこわれたりして、目をおおような惨事になります。これは非常に残念な事です。

私が思いますに、人は病気になるれば良医にかかりなおそうとするように、船は海上で風の難にあえば港に入って、その難をさけるより外に方法がありません。そこで、私は西宮港をそのような港にできないか日夜思案しました。そして次のように考えました。夙川と芦屋川が大量の土砂を運んで川底を浅くし、洪水がおこりやすく、田畑に大きな被害を与えています。そこで夙川の東側の浜より沖の方へ、石砂を積んだ舟を海底に沈めれば、洪水が流す土砂の勢いで川底の土砂は海へ流されて、そこには自然と築洲ができます。

長年月かけてこの工事をしていき、築洲が六百間の長さになれば、川底の土砂は少なくとも洪水の心配はなくなり、田畑も耕しやすくなります。そして、築洲より西の白浜は新田となり、陸には耕作のたよりが得られます。東の海は港となり、海は風波の患いがなくなります。

それで、先年御公儀（大坂町奉行所）様へ築洲工事の願いを出したところ、お許しが出来ました。私にはこれ以上の喜びはありません。しかし、築洲工事は私の力だけではどうする事もできませんので、諸方の方々、工事の方法に良い知恵を貸して下さい。また、工事の費用も金額の多少は問いませんので援助をお願いいたします。

（享和元年西三月 摂州西宮浦 願主 当舎金兵衛）

築洲の形を絵図にして、西宮神社の絵馬堂に奉納しましたので、あちら方面へ行かれた時はついでに御覧ください。築洲工事完成祈禱のために、一切経を一石に一字ずつ書いた



写真 西宮築洲略図と勸進帳

(『武庫地方郷土史料目録』大正15年)

経石を海底に沈めたい願いがありますので、この願いに賛同していただける方は、お経を石に書いて下さることをお願いいたします。以上が勸進帳の主な内容です。

#### 4 築洲の工事

当舎金兵衛の勸進帳による呼びかけと絵馬は功を奏したらしく、「四井屋久兵衛覚之事」に着工の事が出てきます。

享和2年(1802)1月 神呪寺で築洲

#### 寄贈資料一覧

平成4年：火打ち石・火打ち金(辻茂美)、タンス(堀一雄)、儀礼章(常見孝)、唐箕・有床スキ・牛の肩カケ・ムギコキの歯・唐サオ・草取器・馬鍬・桶・籠・丸太運び・俵シメ・箕・お膳・麦扱き・万石のジョウゴ・タニアゲ・田植縄・鞍・モミひろげ・苗籠(野村孝幸)、手動ポンプ・手斧・大鋸・笠(加島貞二)、昭和16年12月9日付朝日新聞

成就祈禱が行われ、25日 築洲の頭石として牛5頭に引かせる大石が越木岩新田より寄付され、27日 神呪寺、段上村、門戸村、上大市村、下大市村、上ヶ原村6ヶ村より経石多数が寄付されました。

2月1日 西宮港において神呪寺僧による築洲成就祈禱が行われ、この時、寄付された大石に梵字を三字彫り付けた石とともに寄付された多数の経石が海に沈められました。7日に蔵人村より58人、11日に小林村より68人、伊子志村より50人の築洲工事のために助成がありました。

このようにして築洲は作られました。その後の工事は西宮町人の手にゆだねられ、年々工事を進め、1年に14、5間ずつ築洲を延ばしていきました。しかし、時化のために築洲はくずれの事もあり、また費用の不足からも計画の600間は達成されませんでした。

しかし、江戸へむけての新酒番船が大坂より出帆していたのが、築洲が作られたことで西宮港より出帆するようになりました。

当館では、「西宮築洲絵図」を探しています。(参照文献)「西宮市史」2・「浪速叢書」5 (いさか やすじ 当館館長)

(山下忠男)、水筒栓・貴重品袋(池田梢一)、両手挽(松山清次)、唐箕・受箱(袋布要蔵)、手あぶりの火鉢・カメラ・ココタツ・レンタン入れ・コタツのタドン入れ(住吉神社・辰野宇加美)、俵(財団法人山口町徳風会)、足踏脱穀機・唐スキ(樋口龍一)

ご寄贈ありがとうございました。

(平成4年6月~12月、敬称略)

#### 目次

資料館ノート	
常設展示室の展示学(西川卓志)	1
西宮市における石造遺品について一補遺一(坂田磨耶子)	3
収蔵庫ノート	
西宮築洲勸進帳と絵馬(井阪康二)	7

寄贈資料一覧	8
--------	---

表紙：西宮神社社頭遺跡出土軒瓦拓影  
(『西宮市文化財資料第26号』を一部改変)

西宮市立郷土資料館ニュース第12号  
発行 1993年1月1日 西宮市立郷土資料館  
〒662 西宮市川添町15番26号 TEL 0798-33-1298